

2007年 研究成果報告書

お年寄りから子どもまで
市民に幅広く利用される公園の研究

平成19年10月
金沢まちづくり市民研究機構
4Aグループ

研究員
堀江 常 稔
苗田 敏美
毛利 泰江
菅村 美知子

研究報告書発刊にあたって

本報告書は、平成15年に設立された金沢まちづくり市民研究機構第4期研究員の諸氏が1年間をかけて調査・研究した成果を金沢市への提言という形でまとめたものです。

さて、この研究機構は、金沢世界都市構想および金沢世界都市戦略会議の提言を受けて設立されたものです。その趣旨は金沢を世界都市として、世界のオンリーワンをめざす政策を、金沢に住み、金沢を愛する市民自らの手で調査・研究し、提言しようとするものです。この研究機構には専属のスタッフはいません。応募した市民研究員がスタッフであります。月1回ないし4回の、しかも夜の研究会や休日のフィールドワーク等を通じて、調査・研究してきました。この報告書はまちなかの生の声としてまとめられたものです。

その成果を研究成果発表会で公開し、今後の金沢市政策に反映されることを期待しています。

しかし、1年、2年と進み、今回で4期目となり、その取り組みに新しい工夫を加えるなど活性化が必要ではないかとも考えます。さらに、金沢周辺の大学の先生方をお願いしている研究ディレクターの先生方の負担も大きいものになっているのではないかと考える次第であります。

これらのことも踏まえて、第3期の研究発表会を市民の皆さんをはじめ県内外から集まるJR金沢駅東広場もてなしドーム地下広場で開催し、多くの皆さんに関心を持っていただき、好評をいただきました。これが国内はもとより世界に広がることを願っています。

ここで、改めて本研究機構のモットーであります「小さく生んで大きく育てる」の精神に帰って地道に努力して行きたいと思えます。

最後にご支援いただいた地元大学をはじめ関係機関の皆さんに感謝申し上げます。

平成19年10月

金沢まちづくり市民研究機構
機構長 小堀 為雄

第4期研究グループと研究テーマ

- 4Aグループ お年寄りから子どもまで市民に幅広く利用される公園の研究
- 4Bグループ 市民・住民の参加・主体による個性的で豊かなまちづくり(2)
- 4Cグループ 市民による金沢文化の継承と発展 II
～地域における文化体験学習／教育を考える～
- 4Dグループ 北陸新幹線の開業を見据えた金沢型クリエイティブ産業の振興
～現代アート・ファッション都市・金沢～
- 4Eグループ 知識社会への情報戦略と産業政策
- 4Fグループ 金沢らしい介護保険と「地域密着型サービス」のあり方を考える
- 4Gグループ 金沢アートセンター計画
- 4Iグループ 人と自然にやさしいまちづくり・「コンパクトシティ」を目指して
～安全で快適な自転車交通と自然エネルギーの研究～

(注) 報告書は各グループ毎の分冊となっています。

4Aグループ「お年寄りから子どもまで市民に幅広く利用される公園の研究」

1. 問題と目的

4Aグループでは、「お年寄りから子どもまで市民に幅広く利用される公園を研究テーマとして、21世紀の金沢にふさわしい公園を考え、それを金沢市の公園づくりの具体的施策に反映可能な提案をすることを目標に研究を行ってきた。期間は2006年10月から12月のおよそ3ヶ月間である。

子どもからお年寄りまで市民に幅広く利用される公園を実現するため、ディレクターと研究員による資料収集と議論によって「あおぞら広場」と「参画型アミューズメント公園」をコンセプトとした。

なお、「あおぞら広場」と公園作りの基本的考え方となる公園の形態を以下に示す。

①「あおぞら広場」について

金沢市において公園内の回転遊具器具が故障するという事故があった。直ちにこの遊具が取り外されたり、使用禁止となったりした。それはそれで適切な処置であると思うが、いま一度考えてみると、子どもたちが好んで遊ぶ遊具ほどいたみやすくなっている。だからといってこれを取り外すのは短絡的ではないか。以前に「用水に子どもが落ちるから頑丈な柵をつけて欲しい」「用水に蓋をかけてはどうか」「もう田圃(水田)や畑がなくなったから用水はいらないのではないか」とささやかれたことがある。犀川や浅野川に子どもが落ちることはない。子どもに対する親のしつけ、または社会のルールの教え方が悪いのではないか。自動車に対する交通ルールはよくなった。しかし、小さな社会生活に対する常識が不足しているように思われる。

そこで一つの提案として、金沢市内に点在している、いわゆる町内ポケットパークをお年寄りと子どもたちのふれあい広場とすることを提案する。

例えば広場の一方に沿って、長屋風の待合所を設け、そこにはベンチとトイレを整備する。その前を芝生の広場とし、さらに子どもたちの遊具(例えば滑り台、ブランコ、回転遊具など)を設ける。それを高齢者の人たちが会話しながら、子どもたちを見守ることによって現代型「広見」または「井戸端」となる。このように「お年寄りと子どもたちのふれあい」の場となる「あおぞら広場」が必要であると考えます。

②公園作りの基本的考え方の4タイプ

Aタイプ(自然公園)

- ・ 子どもの遊び場
- ・ 花壇・低木の中の遊歩道

- ・ 築山
- ・ ベンチ
- ・ 全体的に明るい

Bタイプ（遊具のある公園）

- ・ ブランコ
- ・ 滑り台
- ・ 動く遊具（回転遊具等子どもが好きな遊具を含む）
- ・ プール

Cタイプ（子どもとお年寄りが助け合う公園：社会ルール教育型）

- ・ 遊具を配置する
- ・ 園児などに危ない遊具はお年寄りが遊び方を教える
- ・ 大人がいない時間は鍵をかける

Dタイプ（高学年用：スポーツ型）

- ・ 自転車マナー講習型
- ・ バスケットボール
- ・ 軟式テニス
- ・ パターゴルフ
- ・ 壁打ちボール ゴルフ、ゲートボールは禁止

2. 調査

このコンセプトに基づいて、金沢市内の公園の調査を実施した。調査を行った金沢市内の公園は以下のとおりである（※）。

現地調査；

①公園の構造と機能の確認

②公園で遊ぶ子どもたち、その親たち、愛護会の方々、近隣住人の方々への聞き取り調査

調査内容；

年間の公園の利用状況、利用目的、現状の不満、最近発生したトラブル等の実態を調査した。

③平日は子どもたちが公園を利用する夕方、休日は昼間に調査

※現地調査対象公園（14箇所）

天神町緑地公園	出雲中央公園	若宮中央公園
穴水町児童公園	窪伏見台公園	三馬第一児童公園
三馬第二児童公園	三馬第三児童公園	大乘寺丘陵総合公園
長坂みはらし公園	涌波中央公園	寺地なかよし公園
玉鉾公園	西大桑児童公園	犀川河川敷緑地公園

その他、観察のみの調査対象公園は多数にわたる。

以降では、これらの現地調査結果を踏まえた公園づくりの考え方や具体的な提案を述べる。公園づくりのための提案にあたり、本研究では、金沢市との調整により、平成 19 年度に改修予定として計画されていた、金沢市窪にある「窪伏見台公園」をその研究対象とした。これは、実現可能な具体的な提案を検討するために現実の公園の候補が必要であったためである。

3. 「参画型アミューズメント公園」の計画と提案

3.1. はじめに

研究員の問題意識は、「参加型」「金沢の気候を活かす」「エコロジー」といったキーワードに集約できた。このキーワードをベースに一つの公園を対象とした個別具体的提案を示す。

公園・広場の機能を持つ開かれたオープンスペースとして、子どもの創造力を伸ばす遊び場と大人が集える広場の両方を兼ね備え、子どもと老人が交流できる憩いの場の機能を持ち、公園運営に周囲の地域住民が関わるものを「参画型アミューズメント公園」と定義する。その例を窪伏見台公園（図1）を取り上げ、具体的に提案する。



図1

3.2. 参加型アミューズメント公園

(1) アミューズメントエリア：Aゾーン

- 道路との段差をつけないバリアフリー構造とする（図2）。
- 公園の鉄の囲いは安全を考慮しつつもなるべく少なくする（図3）。
- 公園内の広場ゾーンの周りを築山まで一周できる歩ける小道と球技等で遊ぶ芝生と分けることで、中で球技をしていても周囲で散歩やジョギングができるようにする（図4）。
- 公園の入口は子どもが飛び出さないように、また車が入れないようにポール止めをする（図2前掲）。

- スペース確保のため、記念碑は公園の角に移動する（図5）。
- 時計・GPS時計、16時半、または17時には時報が鳴るように配慮する（図6）。
- 道具小屋は死角に当たるため角に移動させ、Bゾーンの幼児が遊ぶ姿がAゾーンのどこからも見えるように安全性に考慮する。
- 自転車置き場の表示版を置き、明確にする（図2前掲）。
- 水道の手洗い場を設置する。
- トイレの建物上に草花を植えるなどし、自然の中に溶け込むような構造にする。
- 休憩の場として、屋根付きベンチを設置し、それ以外のベンチはスペース確保が容易なように折たたみにする。
- 自然と調和させるため、コンクリートやプラスチック等の素材で作られたベンチや遊具はなるべく使用しない。
- 掲示板を屋根付きベンチの付近に作り、町内の交流に使用する。
- 防犯のための公園内と周辺の夜間照明を再検討する。
- 築山の一部に水遊びができる浅いせせらぎとミニビオトープを作る。
- 冒険心を満たす築山を再整備する。
- 木々を減らし斜面を芝生にして、冬はソリ遊び、夏などは段ボールなどで滑れるようにする。
- アスレチック風に木登りができる木製の遊具を作成する。
- 丘の上にミニ小屋（トムソーヤに出てくるようなもの）を建てる。
- その他の遊具・古タイヤの跳び箱・ターザンロープなどをつける。
- 実のなる木（柿の木、グミの木、梅の木など）を植える。



図2



图 3



图 5



图 4



图 6

(2) 乳幼児と親の交流ができる遊びの広場 B ゾーン

- ・ 親と子が座って遊んだり、親同士の育児交流をしたりする青空スペースとして、ウッドデッキ風野外オープンスペースを十分に確保する。これにより、乳幼児と親が玩具で遊んだり、絵本を読み聞かせたり紙芝居などができる。
- ・ 幼児用築山（緩やかな斜面）を作る。
- ・ 乳幼児のためにロータイプのすべり台、木馬やブランコを設置する。
- ・ 囲みのある砂場を設置する（犬・猫が入れない構造とする）。
- ・ 季節を感じることでできる花を植えるための花壇を作る。
- ・ ベンチを数カ所に点在させる。

3.3. 提案理由

① 年間を通して活用されることを意図した構成

窪伏見台公園を含め、公園を利用していた子どもたちへの聞き取り調査では、冬季の公園利用がかなり期待できることが明らかになった。相対的に冬が長く積雪の多い北陸地域において、冬季の公園利用の促進を検討しないことは、他の地域よりも公園利用頻度を低下させる可能性がある。したがって、特に冬季の利用を促進するような公園設計が必要である。

まず積雪時に「そりすべり」が可能な築山の設置を検討してほしい（築山には積雪時に上るための手すりを設置）。築山は極力シンプルなものでよい。

次に、公園の樹木・草花は多種多様なものにし、季節感を感じることでできるものにしてほしい。金沢市内が都市化しており、自然に触れる機会を作るという意味でこの主張は重要である。現在の広葉樹（もみじの木など）は、保育園児が落ち葉拾いをするなど良い教材となっている。どんぐりや木の実など、より季節を感じられる樹木の選定を期待したい。

② 危機管理体制と地域の連携に基づく充実した遊具の検討

現状の「滑り台」のみが存在する遊具の状態は、公園の重要な機能である子どもの遊び場として機能していない状態にある。早急にブランコの台座を付け替えるとともに回転遊具（グローブジャングル）が設置してあった場所に遊具を設置してほしい（図7）。窪伏見台公園で遊ぶ子どもたちや近隣保育所への聞き取り調査を行った結果、遊具が充実していないことにより、公園の魅力が低下している実態が明らかにされた。遊具の設置の検討は春季を目標に早急に取り組むべき点である。

遊具に対する提案について、具体的には2006年6月まで設置されていた回転遊具を再度設置できるかどうか、近隣住民とともに十分な検討が必要である。回転遊具が近隣住民にとってどのように受け取られているのか調査し、西大桑町公園で起きた事故を隠さず周

知するとともに、公園近隣住民たちがどのように利用・維持していけるかを住民主体で検討し、設置の是非を考える必要がある。事故が起こり危険であるから遊具を撤去し続けていくのは問題の解決になっていない。このことを市役所はもちろんのこと、住民たちとともに再度認識していかなければならない。子どもたちの「危険」を学習する機会が奪われていないか、金沢市をはじめ大人の側は再度検討する時期に来ている。



図7

遊具の設置とともに次の具体的な点についての対応・検討が望まれる。

- ・ 公園看板に貼り付けられた「花と緑の課への電話番号」はあまりに目立たなく、全く気づかない。気づくことができない場所に連絡先を示しても公園の異常を連絡することはできない（図8）。
- ・ 遊具設置箇所、またはベンチに遊具の遊び方を明示し、何が危険なのかを伝える。具体的には、携帯電話のストラップを首にかけていたり、かばんをかけていたりして遊ぶのは危険であることなどである（図9）。
- ・ リスク管理のためにも最寄りの交番・病院の電話番号やその所在地、近所の緊急駆け込み先などを、地域住民と連携の下で明示する必要がある。公園の遊具で怪我をすることが問題なのではなく、怪我の原因や怪我をした際の対応方法が事前に検討されていないことが問題であると考え。もちろん怪我をさせていいということではなく、100%安全な遊具が製作可能なのかということと、完全に安全な遊具が子どもにとって魅力的なものなのかという点については市が判断することではなく、公園の利用主体である近隣住民（特に子どもとその親たち）が検討の上で判断するべ

きものである。

- ・ 遊具の製造年月日や設置年を大きく明示すべきである。遊具に不具合が起こる前に古さの気づきを与える意味で効果がある（図 10）。
- ・ 遊具のメンテナンスを「十分」に実施するとともに、近隣住民にも協力してもらうことが必要である。窪伏見台公園に限らず、どの公園も遊具のメンテナンスが極めて不十分であることに驚いた。遊具の錆びや周辺環境のチェック、可動部の注油や防護など、本当にメンテナンスを行っているのか疑いたくなるような状態のものが多い。再度メンテナンス体制について検討してほしい（図 11）。



図 8



図 9



図 10



図 11

③ 公園サミットの開催

市民の声を積極的に吸い上げて公園作りの参考にするとともに、公園への愛着を持ってもらう集いの機会を作る。市内にある多くの公園同士が連携し、意見交換を行う公園サミットの開催によって、地域密着型の「私たちの公園」という意識を高める。

また、金沢あおぞら公園サポーターズクラブを作ることなどが具体的提案として考えられる。これにより、公園を持つ地域の横の連携と交流の促進が期待できる。なお、サポーターには子どもへの遊びの伝承の役割を持たせたい。そのため、サポーターには地域の子どもの遊び、体験の指導者となることが望まれる。当然、これには指導のための教育・育

成が必要である。したがって、公園や緑と花に関する研修を実施することも必要となろう。

そのための準備として、金沢市内の公園マップの作成が必要となる。公園の情報として、どこに何があり、どのような特徴があるのか、容易に把握可能な資料としての価値を持つに違いない。

※各公園の特徴と維持・運営のための努力・工夫を話し合い、お互いに参考にしてよりよい公園作りをめざす。

4. おわりに

「公園」の役割とは一体何だろうか。昔はお年寄りから子どもまで自然と集い、コミュニケーションできる「場」があった。都市化・核家族化の進展した現代生活の中にはそのような「場」が姿を消してしまった。「公園」を単なる子どもの「遊ぶ空間」として捉えるのではなく、現代社会における重要なコミュニケーションの場として活用できたら、昨今起こっている社会問題も少しは改善されるかもしれない。

これからの公園は管理側だけではなく、利用する周囲の地域住民の参画を促すことが肝要である。地域の積極的なボランティアの力を活用し、行政・住民双方で公園に子どもが集まるような魅力あふれるものに再検討しなければならない時期にある。

調査を行ったほとんどの公園は閑散とした状態であり、確かに一定の防災の役割を持つとはいえ、公園本来の姿とはほど遠い現状である。子どもの立場から、また親の立場から公共の公園について幅広く討論する場が必要である。また、利用の少ない公園の問題点を明確にするためにも、金沢市内の全ての公園利用の実態を調査する必要がある。

場所 金沢市窪4丁目547番
面積 0.40ha (3,977m²)



市民研究会活動

回	月日	曜日	場所	ディレクターの出欠	市民研究員参加者数
1	9月11日	月	南分室1階研究室	出	3
2	9月15日	金	南分室1階研究室	出	2
3	9月29日	金	南分室1階研究室	出	4
4	10月12日	木	金沢市内公園F.W.	欠	3
5	10月13日	金	南分室1階研究室	出	4
6	10月18日	水	金沢市内公園F.W.	出	4
7	10月25日	水		出	3
8	11月15日	水	南分室1階研究室	出	3
9	11月22日	水	金沢市内公園F.W.	出	3
10	12月6日	水	南分室1階研究室	出	2
11	4月13日	金	南分室1階研究室	欠	4

